



真鍋 香織 Kaori Manabe

デリカウイング株式会社 デザート工場 商品開発部  
(2001年3月生物生産学部卒業)

—入社のきっかけと今の仕事内容は?

昔から「食」に興味があったんです。大学時代にはずっと飲食店でアルバイトをしていました。生活に密着した食に関する仕事がしたい、自分がサービスをすることで人に喜んでもらえる仕事がしたいと思ったのがきっかけです。



現在は、セブンイレブンで販売されるデザートの商品開発を担当しています。新商品を開発する際に最も重要なのが市場調査。いろんなお店を見て回り、今どんなデザートが人気なのか、何が流行っているのかといった情報を集めます。それをもとに商品のコンセプトを決め、試作品を作るんです。コンビニエンスストアは子どもからお年寄りまでさまざまな方が利用されるので、誰からも支持される商品でなければいけません。甘さや食感などは、分析機器を使って数値化するのが今の時代の流れですが、やはり最終的に頼るのは人間の味覚です。誰が食べてもおいしいと思えるものを生み出すために、ほぼ毎日のように作っては食べ、作っては食べと何度も試食を繰り返し、プレゼンテーションに挑みます。

—楽しんで働くことで、自分の存在価値が見つかる。

—やりがいを感じる瞬間は?

何といても自分が携わったデザートがお店に並び、それを身近な人が食べてくれたり、見ず知らずの人が買ってくれたりするのを見た時です。特に、壁にぶつかりながら作ったものが世に出た時の喜びは大きいですね。一番思い入れがあるのは「抹茶ロール」。中国地区限定ということで開発したのですが、売り上げが良くて全国販売になりました。今の目標は大ヒット商品を作ること。将来的には、新しい食文化を創るような食品を開発していきたいと思っています。

—学生時代に描いていた社会人像とのギャップは?

学生の時は、社会人ってつらいことが多いだろうな、毎日が淡々としていてつまらないだろうなと思っていたのですが、実際は楽しいです! ビジネスの世界は最高です! 自分たちが汗流して稼いでいるお金が、世の中を動かしていると思うと、やりがいと同時に責任を感じますね。また、働くことによって、家族や社会に対して私自身が貢献していると実感できた時、自分の存在価値が見いだせます。

社会人になってからは、オンとオフのメリハリをつけるように心がけています。プライベートを楽しむことが、仕事の瞬間発力になると感じているから。学生の皆さんにも「しっかり遊んで!」と言いたいですね。



社会の第一線で活躍している先輩たちの職場を訪ねて、突撃インタビュー。仕事のことから学生時代に身に付けておくべきことはまたプライベートの話まで。私たち学生の素朴な疑問・質問にお答えいただきました。

# 羅針盤

# OB&OG紹介



## 取材を終えて



最後までずっと、こちらをまっすぐ見て話してくださり、その目の力がとても印象的だった真鍋さん。取材という限られた時間の中ではありますが、明確な目標を持ち、非常にいきいきと動かれている方だと感じました。また、自分の仕事为社会にどう貢献しているかなど、働くことに対する想いを語られる姿は、とても魅力的でかっこ良かったです。

取材・記事 / 総合科学部2年 森尾 洋一



テレビ局という華やかで臨場感あふれる場所が私にはまぶしく、取材中はずっと興奮しっぱなしでした。カッコイイ!!と誰もが思うカメラマンというお仕事。でもその裏には、数知れぬ陰の努力とプレッシャーがあるのだと知って納得。私も将来は、堀田さんのように緊張感を持ちつつ楽しめるような仕事をしたいと強く感じた一日でした。

取材・記事 / 教育学部3年 清水 美帆

—テレビ局のカメラマンとしてどんな仕事を?

スタジオや中継を担当しています。複数台のカメラを使うことが多く、それぞれが撮影する映像がスイッチングされて放送されるので、チームワークが大切ですね。もちろんプレッシャーは感じます。自分の撮った映像が、そのまま電波に乗って各家庭に流れるわけですから。一つ一つの撮影に神経を使うようにしています。

入社当時はデジタルメディアセンターという部署でインターネット関連の仕事をしていました。でも次第にカメラを担当したい、現場で働きたいという思いが強くなり、人事異動で今の仕事に。常にやりがいを感じますし、やっぱり撮影現場はおもしろい。離れたくないですね。

音楽ものだと、庄原市で行われた音楽イベント「SETSTOCK」。アシスタントとしてつかせてもらったんですが、すごく楽しかったですね。それから、昨年の夏に行われた第44回衆議院議員総選挙では、ホリエモンことライブドアの堀江社長の出馬で日本中から注目されていた広島6区の亀井事務所を担当。全国ネットの放送で、絶対に失敗が許されないと



堀田 浩司 Koji Horita

株式会社中国放送 技術局制作技術部  
(2000年3月大学院工学研究科システム工学専攻修了)

—とにかく撮影現場が好き。プレッシャーを楽しみたい。

カメラマンになってまだ2年ちょっと。今の私にとってテレビというのは「それ以上でもそれ以下でもない、自分を表現する場、ぶつける場、たたかう場」です。

—今までの撮影で印象に残っているのは?

野球中継なら、清原選手の500号ホームランや野村選手の2000本安打の瞬間に立ち会えるのは印象的でした。



というのは恐ろしいほどのプレッシャーでした。ただプレッシャーは感じ始めると堂々巡りになるので、思い切って楽しんで撮るよう心がけています。

—もし学生時代に戻れるとしたら何をしますか?

勉強...かな。今の仕事では、本当は電波の免許などを持ってほががいいんです。大学時代に関連する授業があったのに、必修ではなかったので逃げていた。それが今必要になって。だから勉強しますね。あとは、とにかく時間の無駄遣いをしない。

時間の大切さ以外に、社会人と学生の違いとして感じるのが責任の重さ。社会人として信用を得るといことは本当に大変です。人から信頼されるカメラマンを目指し、責任感を持って仕事をしていきたいと思っています。